日刊 動労千葉

87.11.20

No.2707

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二(22)七二〇七

『全民労連』結成弾劾

「全民労連」は百害あって一利なし

第12回大会（10/16-17）での中野委員長の提起より……

「全民労連」が十一月二〇日に発足する。総評は過日の大会で三年後に解散すると決定し、日本の労働運動全体が大きく揺れ動いている。こうした状況は、われわれにとってけっして無縁ではない。職場で「いったいどうなるのだろう」と心配するのは当然だと思います。

全民労連の正体は明らか

何故こういう状況になったか。

ひとつは、これまで総評が様々な運動を展開してきたけれど「組合自体が形骸化し、力もなくなり、春闘もできなくなっている。労働者の要求も通らなくなってきた。だからみんな一緒になった方がいいんじゃないのか」ということと、もうひとつは、何よりも政府・自民党・支配者の側から、この大変な時代にあって「労働運動を大きく再編する必要がある」ということがミックスされてでてきたものです。

これはわれわれ労働者にとって「百害あって一利なし」という代物です。

そして、その正体は、国鉄を見ればはっきりしてくる。一企業一組合を狙う連中の実態はどうなのか。国労やわれわれを解体しようと目論んでいる。当局と一緒になり、労働者を強引に支配し、当局の意志を「組合」を通じて貫徹していく。反対勢力は手段を選ばず排除する。こんな連中と一緒になれるはずがない。したがって動労千葉の方針はハッキリしています。

自民党支持の組合づくり

今、日本は極めてあぶない動きにあります。自動車、電気、造船など日本のビッグビジネスが「労資協調」で総評を脱退し、同盟へと移行した頃は、いわば御用組合だった。しかし、「全民労連」は、こういうレベルより一歩進んだものを作ろうとしている。

現在、「全民労連」発足というなかで「政党も再編しなくてはならない」という動きにある。社会党が民社党と、公明党も含めて統合しなくてはいけないと言っている。しかし、ことはそういうレベルをはるかにのり越えて、自民党を支持する労働組合を作ろうとしている。また、そういう方向にならざるを得ないということをハッキリと見極めなくてはならない。

だからそんなものは、解体の対象でしかない。あたり前のことです。

革マル顔負けの日共・統一労組懇

労戦「統一」の動きのなかで、それに反対する勢力があるのも事実です。

しかし、これらの勢力は、自分たちの存在を証明するために、自らの「左翼性」を誇示するために、「労戦『統一』反対」をもて遊んでいる傾向がなきにしもあらずだ。

反対をしている最大の勢力は、日共・統一労組懇である。こういう連中は、われわれがストライキに決起した時、スト破りをやった。千葉転・津田沼でスト破りをやった。国労は「全民労連不参加」を決定した。大いに結構です。しかし、いままた日共＝革同系の諸君は、現場では積極的に「小集団活動」について、革マル顔負けのことをやっている。うどん屋になろう」と言っている。組合員に「タダ働き」を強制し、かりたてている。こんな勢力が大きくあるということは大変な悲劇です。

闘わなくてなんの組合か

労働者は何んのために組合を作っているのか？　資本から労働者がいためつけられるからこそ、それに抵抗するためにつくっているのです。

問題は中味です。本当に労働者のための組合なのか、労働者の利益を労働組合が代表しているのか。労働者の利益を守るためにはどんなに傷を負っても、火の粉をかぶろうが闘う、そういう組合が本当に必要です。闘わない組合だったら作る必要なんかないんです。

資本の先兵 鉄道労連解体

全造船石川島分会の佐藤委員長は、「『全民労連』や鉄道労連の組合員は膨大な未組織労働者だ」と言った。全くその通りです。鉄道労連は、形は組合だが何も労働者のためになってはいない。

われわれの進む道はハッキリしています。当局に首切りを要求する鉄道労連を解体する。これが、労戦「統一」反対の実践的結論です。

県下労働者との連帯を深めよう

われわれは千葉県労連に入っている。県労連が「全民労連」参加方針をとっていたからといって、脱退するのか？　地区労を脱退するのか？　そんな単純なことをやる気はない。県内労働者に語り連帯を深めていく、全国でも地区労でも、われわれは「こう闘っている」ということを声を大にしていこうではありませんか。

動労千葉は、結成以来日本労働運動史上かってないようなたたかいを展開してきた。不可能を可能にしてきた。今もやりつつある。組合員一人ひとりがその気になって立ちあがることが決定的だ。一人ひとりが燃えたっていこう！革マル・鉄道労連を解体しよう！